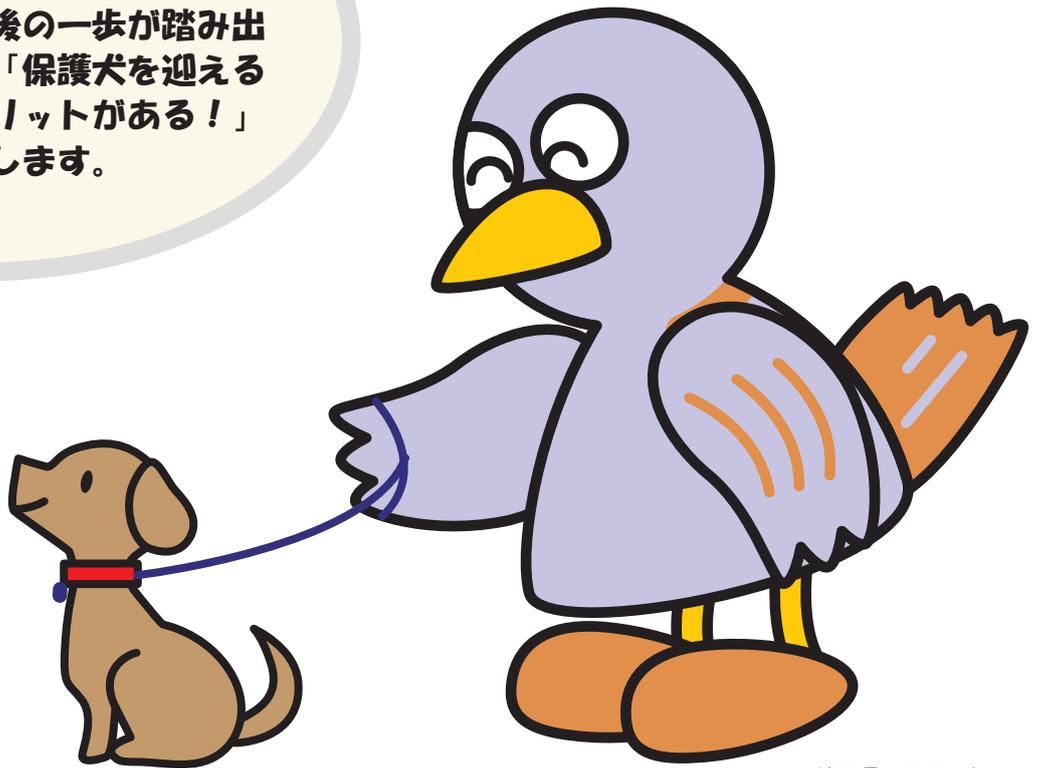




# 保護犬を 家族に迎える 8つのメリット

埼玉県では、殺処分される不幸な犬・猫の数を減らすため  
新しい家族として犬・猫を迎えていただける方を募集しています。

愛護センターや保護団体などから犬  
を引き取りたいと思って、いろいろ  
調べたけれど、最後の一步が踏み出  
せないという方に「保護犬を迎える  
ことにはこんなメリットがある！」  
という例をご紹介します。



埼玉県マスコット  
「コバトン」

知っていますか？ 日本では年間約3万8千頭※もの犬・猫が殺処分されています。  
犬や猫を飼いたいと思った時に、どうか思い出してください。  
あなたが差し伸べる手で救える命があることを……

※ 平成30年度のデータ（埼玉県は犬177頭、猫595匹）

動物と共生できる埼玉県をめざすボランティア協議会

※ 「動物と共生できる埼玉県をめざすボランティア協議会」は彩の国動物愛護推進員を含むボランティアによる任意団体です

## 保護犬を家族に迎える8つのメリット

### 1. 子犬期を過ぎて落ち着いた犬を迎えることができる

子犬の可愛らしさは大きな魅力です。でも、その魅力にひかれて子犬を衝動買いしてしまい、その後、世話がめんどろになってしまう人も少なくありません。子犬の世話は人間の幼児を育てるのと変わらないくらいの覚悟が必要になります。それに比べると、落ち着きの出来た年齢の保護犬は飼うのに理想的とも言えます。

また、犬の寿命は20年近くに達する場合があります。シニア世代の方が犬を迎えようとする場合、人と犬が共に年齢を重ねていくことを考えると、穏やかに過ごす時期を一緒に過ごすことができる保護犬を迎えることは、望ましい選択肢と言えます。

### 2. 迎える犬について把握できる

子犬の場合、「予想以上に大きく成長してしまった」、「成長したら子犬の頃とはずいぶん性格が変わってしまった」などの問題が生じる場合があります。

心や体がある程度成長した保護犬ならば、このような予想外の状況になる確率は低くなります。

犬の性格や何に気をつければ良いかなどがわかっているならば、犬との暮らしはとても過ごしやすくなります。

### 3. 保護犬はあなたの意図を理解しようとする

家庭で飼われている犬と保護犬を比較した調査の結果では、家庭で飼われている犬は人間が指差して示すものを素早く理解することが優れているのに対して、保護犬は人間が何かを指差した時、すぐに理解できなくても人間を注視して、その意図を理解しようとする傾向が強いということがわかったそうです。

人間との接触の機会が増えれば、保護犬もちゃんと飼い主とのコミュニケーションが取れるようになります。

### 4. 保護犬は「ビフォーアフター」を見せてくれる

保護犬はそれまでの生活環境がわからない場合がほとんどで、皮膚や被毛の状態が悪くて見た目が良くない場合も少なからずあります。でも、家庭に迎えられた保護犬は、良い食事や規則正しい生活をすることで劇的に外見が変化することが少なくありません。

また、新しい家庭に迎えられると、自分だけの家族に囲まれて愛されることで表情が見違えるほど明るくなり、可愛らしくなります。

自分の手で犬を幸せにして、その変化を目の当たりにするのはとてもうれしいことではないでしょうか。

### 5. 保護団体から迎えた保護犬は避妊去勢手術が済んでいる

多くの保護団体は、譲渡の前に避妊去勢手術を済ませています。

これはアクシデントなどで行き場のない動物が増えてしまわないためにとっても大切なことです。

### 6. 一時的に預かる方法を試してみることもできる

保護団体によっては、保護犬の引取りを希望された方に犬を一時的に預かってもらい（トライアル）、その後、引き取るかどうか決められるシステムを取っている場合があります。

また、保護団体に協力して、家族を待つ犬の一時預かりのボランティアをしてみるということも考えられます。

「犬と暮らす」ということを実際に体験でき、保護犬にとっても家庭で過ごすということの訓練になります。

保護犬の引取りに迷っていたり、心の準備ができていないと思う時は、これらを検討してみたらいかがでしょうか。

### 7. 1頭の犬の命を救うことができる

### 8. さらに、もう1頭を救うことになる

保護犬を1頭引き取ることで、行政施設や保護団体の施設などに1頭分の空きスペースができます。

これは殺処分になるかもしれない犬1頭の行き場が生じるということです。

つまり、「保護犬を1頭引取ることは、2頭の犬を救う」ということになります。

## まとめ

どんな場合でも忘れないでいただきたいことがあります。

それは「動物を飼うということは命を引き受けること」であり、

「その動物の一生に責任を持つ」ということでもあります。

その重く強い覚悟を胸に、大丈夫だと思えたら、ぜひ「保護犬を迎える」という選択肢を考えてみてください。